

特別講演

武道とはいかなる意味で日本的なのか

—国際化を「モノ」と「こと」から考える—

小笠原 泰 (明治大学 国際日本学部)

日 時：平成22年9月2日 (木)

13:40～14:50

会 場：メディア棟 M301

中学校の新学習指導要領においては、多くの教科において「我が国（日本）固有の文化」に触れさせることが強調されています。保健体育科目においても、平成24年度から武道の必修化が完全実施されます。これは、構造改革という標語のものにグローバル化を一挙に推し進めようとした旧政権の掲げた「美しい国」構想と軌を一にすると聞いていますが、「美しい国」構想そのものが、一方的なグローバル化のなかで日本というアイデンティティが喪失していくのではないかという不安を暗黙裡に反映したものでなかったかと思っています。この意味で、武道が、「日本固有の文化」と結び付けやすいものとして着目されたことは、理解しやすいことだと思います。

一方、『クール・ジャパン』という言葉が耳にされる方も多いかと思いますが、『クール・ジャパン』とは、もともと、漫画・アニメ・ゲーム・J-Popなどのポップ・カルチャーを指す場合が多いのですが、最近では、スシを始め、和食といわれる日本食、武道などの伝統文化、電気機器などの日本製の高品質な工業製品など、日本に関わる事物全体にその対象が広がりつつあります。つまり、『日本的なるもの≒日本文化』が、海外で『クール（カッコイイ）・ジャパン』として、話題になり、評価されている現象を意味します。この現象に着目した政府は、『日本ブランド戦略～ソフトパワー産業を成長の原動力に～』という報告書を平成21年3月に出して、国家的な指針を示しています。基本的には、『クール・ジャパン』の活用と発揚を唱えた楽観的な経済成長のシナリオです。

このような「ウチを向く日本というアイデンティティの再確認」と「ソトを向く日本的なもの≒日本文化の海外への発信と海外での受容の促進」という、相反する流れをどう捉えるかは、非常に重要です。

その捉え方の基礎となるのが、「グローバル・パラドクス」という考え方ではないかと思っています。グローバル化が進めば進むほど、世界の一元化が進み、ナショナリズムの時代が終焉し、グローバル時代が到来するとお考えの方々も多いかと思いますが。確かに、グローバル化の流れは、不可逆です。しかし、現実のグローバル化は、「ローカルなコミュニティから人々をグローバルな世界へと放り込むと同時に自律分散化を可能とし、多様性を許容する」という、共通市場の形成に向けた一元化という単純な動きだけではなく、その流れと相反してローカルの自律性も高まり、ローカルの軸足の確立も求められる、所謂、「グローバル・パラドクス（逆説）」と言う状況なのです。つまり、社会がグローバル化すればするほど、外部異質性の存

在の認識を通じた内部同質性の確認・強化、つまり、独自性（差異）への認識が強くなるという構造を理解する必要があるのです。

本講演では、この「グローバル・パラドクス」という構造的な理解を基礎として、武道を例に、「日本的とはなにか」「武道は、どう日本的なのか」「文化とはなにか」「武道は、文化と言えるのか」「武道をグローバル化の視点で考えると、日本文化として維持することは可能なのか」「グローバル化が不可逆ななかで、日本文化としての武道の国際化は可能なのか」についての議論を展開していきたいと思います。

小笠原 泰（おがさわら やすし）氏

明治大学国際日本学部教授

東京大学卒、シカゴ大学大学院国際政治経済学修士、同大学院経営学修士。
マッキンゼー&カンパニー、フォルクスワーゲンAG（ドイツ本社）を経て、
米国カーギル社ミネアポリス本社入社。同社オランダ・英国法人勤務を経て、
NTTデータ経営研究所。同社パートナーを経て、2009年4月より、現職。

静岡大学大学院工学研究科客員教授

京都工芸繊維大学特任教授

日本経営品質賞判定委員会委員

研究領域：

経営組織文化論、日本社会システム論、日本型イノベーション論、知識経営論

主たる著書：

『日本型イノベーションのすすめ』 日本経済新聞出版社 2009年

『なんとなく、日本人』 PHP新書 2006年

『日本的改革の探究』 日本経済新聞社 2003年